

好ましい人間関係を育む学級づくりに関する研究 ～「学級づくりガイドブック」の再編集を通して～

千葉県総合教育センター
カリキュラム開発部研究開発班
研究指導主事 串田 篤則

1 主題設定の理由

近年、学級づくりの価値が改めて見直されている。中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）に「総則においても、小・中・高等学校を通じた学級・ホームルーム経営の充実を図り、子供の学習活動や学校生活の基盤としての学級という場を豊かなものとしていくことが重要である」と述べられているように、子供たちの学習や生活における学校や学級の重要性が改めて捉え直されているのである。

また、生徒指導提要（令和 4 年 12 月）に「学級・ホームルームは、児童生徒にとって、学習や生活など学校生活の基盤となるものです。児童生徒は、学校生活の多くの時間を学級・ホームルームで過ごすため、自己と学級・ホームルームの他の成員との個々の関係や自己と学級・ホームルーム集団との関係は、学校生活そのものに大きな影響を与えることとなります。教員は、個々の児童生徒が、学級・ホームルーム内でよりよい人間関係を築き、学級・ホームルームの生活に適応し、各教科等の学習や様々な活動の効果を高めることができるように、学級・ホームルーム内での個別指導や集団指導を工夫することが求められます。」とあるように、教員は児童生徒の学校生活の基盤となる学級づくりを充実させることが求められる。

本県においても、第 3 期千葉県教育振興基本計画「次世代へ光輝く『教育立県ちば』プラン」（令和 2 年 2 月策定）において、よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組の充実について以下のように示されている。

基本目標 1	ちばの教育の力で、志を持ち、未来を切り拓く、ちばの子供を育てる
施策 1	人生を主体的に切り拓くための学びの確立
(1)	子供の学習意欲を高め学力向上を図る取組の推進
○	<u>よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組の充実（関連 施策 5（2））</u>

基本目標 2	ちばの教育の力で、「自信」と「安心」を育む学校をつくる
施策 5	人間形成の場としての活力ある学校づくり
(2)	豊かな学びを支える学校・学習環境づくり
○	<u>よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組の充実（関連 施策 1（1））</u>

これらのことを踏まえ、本研究では平成 25 年 3 月に当センターから発行された「学級づくりガイドブック」に述べられている内容を軸に、再編集することを通して、好ましい人間関係を育む学級づくりの方向性を明らかにしていく。そして、再編集したガイドブックを県内に広く周知していくことで、学級づくり、人間関係づくりの一助になればと考え、本研究主題を設定した。



2 研究の目的

「学級づくりガイドブック（平成 25 年 3 月発行）」の再編集を通して、好ましい人間関係を育む学級づくりの方向性を明らかにする。

3 研究計画

令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
○基礎研究（実態調査、文献調査、全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙結果分析）	○実践校の選定	○ガイドブックの有用性を調べるための基礎研究（有識者助言等）
○調査研究計画立案	○学級づくり、人間関係づくりについての基礎研究（有識者助言等）	○ガイドブックの有用性及び課題の検討（アンケート・モニター調査）
○データ収集	○実践事例収集	○リーフレット作成
○収集データ分析	○ガイドブック改訂	
	○研修コンテンツ作成	

4 研究概要（調査研究 3 年間の取組）

(1) 調査研究 1 年目（Plan）

これからの学級づくりの方向性について調査研究をした。アンケート調査結果（教員経験 1 年目から 10 年目の教員 4,658 名）、第 3 期千葉県教育振興基本計画、全国学力・学習状況調査等の分析から、「児童生徒との信頼関係」「児童生徒同士の間関係」「自主的な学級組織」の 3 つの視点を見出した。



(2) 調査研究 2 年目（Do）

「教師と児童生徒との信頼関係」「児童生徒同士の人間関係」「自主的な学級組織」を 3 つの柱として、互いに尊重し合う好ましい人間関係を育む学級づくりの具体的な取組について調査研究を行った。県内 5 つの教育事務所より推薦を受けて決定した 3 校及び教諭 10 名の取組・実践事例を収集し、学級づくりガイドブックを改訂した。



- I はじめに【学級づくり理論編】
- II 学級づくりの進め方
- III 学級開き
- IV 教師と児童生徒の信頼関係
- V 児童生徒同士の人間関係
- VI 主体的に活動できる学級
- VII 同僚・保護者との関係づくり

(3) 調査研究 3 年目（Check）

令和 5 年 3 月に改訂された「学級づくりガイドブック」が、学校現場において、互いに尊重し合う好ましい人間関係を育む学級づくりに寄与するものになっているか、その有用性及び課題を調査し、今後の学級づくりについての調査研究の手掛かりとした（Action）。そのためにアンケート調査や、モニター調査（本ガイドブックを活用して感じた成果や課題等の聴き取り）を行い、「教職員研修用カーパトリック・モデル（P3 参照）」を基に、調査結果の分析をした。



5 今年度の取組

(1) 調査研究の基礎研究

ア 調査研究の基礎研究

(ア) 研究会議（令和5年5月10日開催）より

調査研究3年目の本年度は、PDCAサイクルの「C（チェック）」にあたり、再編集したガイドブックの有用性を調査することをねらいとしている。有用性を調査するためには、「Why（何のために評価するのか）」「What（何を評価するのか）」「Whom（誰に評価をしてもらうのか）」「When（いつ評価するのか）」「How（どのように評価するのか）」を考え、評価を計画的に行うことが求められる。ガイドブックの有用性を調べるための先行研究として、「教職員研修用カークパトリック・モデル」（熊本県立教育センター、2007）を活用することができる。これは、1974年にドナルド・カークパトリックが「研修評価レベル」を4段階に分けた考え方を、熊本県立教育センターが教職員研修用にあてはめた評価モデルである。

(イ) 教育や研修の効果測定をねらう「4段階評価法」について

アメリカの経営学者ドナルド・カークパトリック（Donald Kirkpatrick）は教育や研修の投資効果を測るために、研修前後の変化を4段階で評価するモデルを提唱した。このモデルでは、学習・トレーニングの方法を「反応」「学習」「行動」「結果」の4つのレベルで評価する。具体的には、学習者がトレーニングを受けた際の反応、学習効果、行動変化、そして結果を評価することで、学習・トレーニングの効果を測定する。熊本県立教育センターは2007年の研究で、カークパトリック・モデルを教職員研修用にあてはめた「教職員研修用カークパトリック・モデル」を設定した。

【教職員研修用カークパトリック・モデル】

レベル1	研修をどう感じたか（反応）
レベル2	研修内容をどれだけ理解し、習得できたか（学習）
レベル3	学校へ戻ってから研修内容を実践できたか（行動）
レベル4	研修後の実践により学校や子供がどう変わったか（結果）

(ウ) 「教職員研修用カークパトリック・モデル」を活用した先行研究

土田は、2010年の研究で「課題解決型研修」の効果・有効性について調べるために「教職員研修用カークパトリック・モデル」を活用して調べた。その結果、受講者が研修に満足する（レベル1）だけでなく、研修後に研修で学んだことを実際に活用する（レベル3）等の受講者の変容を見取ることから、「課題解決型研修」の効果・有効性について検証した。

(2) 調査方法

ア アンケート調査について

(ア) 対象

本ガイドブック活用の主なターゲットとする1～6年目の教員（講師経験含む）のうち、「本調査に協力できる方」とした。



(イ) 調査方法及びアンケート内容

調査方法は、Google フォームを活用した。アンケートの内容は、下の
ように設定した。

- 【1】教員経験年数（講師経験含む）**
①1年目 ②2年目 ③3年目 ④4年目 ⑤5年目 ⑥6年目
- 【2-1】「I はじめに【学級づくり理論編】」（P1～5）を読んで参考になったことは何ですか。（複数回答可）**
「学級づくり」とは？ 「好ましい人間関係」とは？ どのような学級を目指すのか？ 本書における学級づくりの全体構想 特になかった
- 【2-2】「II学級づくりの進め方」（P6～9）を読んで参考になったことは何ですか。（複数回答可）**
PDCA サイクルで学級づくりをする 学級づくりを進める上での留意点
特になかった
- 【2-3】「III学級開き」（P10～11）を読んで参考になったことは何ですか。（複数回答可）**
児童生徒を迎える準備 思いを伝える ルールの確認をする
学級目標を決める 特になかった
- 【2-4】「IV教師と児童生徒の信頼関係」（P12～15）を読んで参考になったことは何ですか。（複数回答可）**
教師としてのふるまい 自己開示 率先垂範 児童生徒理解
凡事徹底 感謝の気持ちを伝える コーチング I メッセージ
特になかった
- 【2-5】「V児童生徒同士の信頼関係」（P16～23）を読んで参考になったことは何ですか。（複数回答可）**
集団を育てるとは「つながり」をつくること 人間関係を築く場面
ブレインストーミングからのKJ法 アサーション ピア・サポート
学級の状況を把握する 教師が模範となる 「つながる」「貢献する」「自信をもつ」のサイクル 特になかった
- 【2-6】「VI主体的に活動できる学級」（P24～29）を読んで参考になったことは何ですか。（複数回答可）**
学級づくりに欠かせない話し合い活動 係活動の充実
自発的、自治的な活動 特になかった
- 【2-7】「VII同僚・保護者との関係づくり」（P30～35）を読んで参考になったことは何ですか。（複数回答可）**
同僚の教職員とのかかわり 保護者は児童生徒の成長を一緒に見守るパートナー 特になかった
- 【3-1】ガイドブックは分かりやすく、理解できるものになっていましたか。**
①はい ②いいえ
- 【3-2】（「はい」/「いいえ」）と答えた理由を教えてください。**
自由回答：

- 【4-1】ガイドブックは学級づくりの助けになると感じますか。**
①はい ②いいえ
- 【4-2】（「はい」/「いいえ」）と答えた理由を教えてください。**
自由回答：

- 【5-1】ガイドブックに書かれたことの中で、実際に実践してみたことはありますか。**
①はい ②いいえ
- 【5-2】（【5-1】①はい 回答者のみ）実際にどのような実践をしてみましたか。**
自由回答：

- 【6】今後、「学級づくりガイドブック」に掲載されると役立つと思うことは何ですか。（複数回答可）**
児童生徒との人間関係づくりの手立て 児童生徒の規範意識の高め方
児童生徒同士の人間関係づくりの手立て 児童生徒理解の方法
各教科・領域等の学習と学級づくり 保護者との関係づくり
学級の実態把握（アセスメント）の手立て 学級開きについて
学級づくりとユニバーサルデザイン 行事と学級づくりについて
時期ごとの学級経営のポイントについて 学級目標について
授業をとおした学級づくりについて ICTを活用した学級づくりの手立て
主体的に活動できる学級づくりの手立て 同僚との関係づくり
その他（自由記述）



イ モニター調査について

(ア) 対象

本ガイドブックを基にした「学級づくり」をテーマとした研修受講者のうち、調査協力を申し出た教員（以下、「モニター」）に依頼をして行った。

(イ) 調査方法及びアンケート内容

モニターにガイドブックを郵送して、約2か月の期間をおいて、電話による半構造化面接の形式で行った。モニターへの質問内容は下の通りである。

【1-1】「I はじめに【学級づくり理論編】」（P1～5）を読んで「実際に実践してみたこと」はありますか。
①はい ②いいえ

【1-2】（【1-1】①はい 回答者のみ）実際に実践したことは何ですか。
自由回答：_____

【1-3】（【1-2】回答者のみ）実践して、よい効果はありましたか。
①あった ②なかった ③分からない

【1-4】（【1-3】①あった 回答者のみ）どんな効果がありましたか（児童生徒の反応・自身の感想等）
自由回答：_____

以下、【2】～【7】まで同様に、ガイドブック各章（Ⅱ章～Ⅶ章）について「実際に実践してみたこと」、「（実践した場合）その内容やその効果」についての質問

【8-1】ガイドブックは、よりよい人間関係づくりに役立ったと思いますか。
①そう思う ②ややそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない

【8-2】そのように思った理由を教えてください。
自由回答：_____

【9-1】ガイドブックは、子供たちが自己有用感（「人の役に立った・喜んでもらった」というような感覚）をもてるようになることに役立ったと思いますか。
①そう思う ②ややそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない

【9-2】そのように思った理由を教えてください。
自由回答：_____

【10】ガイドブックを活用した感想（気が付いたこと等）を教えてください。
自由回答：_____

(3) 調査結果

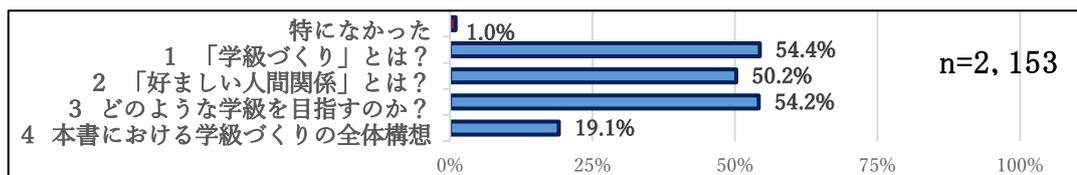
ア アンケート調査結果

県内小・中・義務教育・高等・特別支援学校に在籍する1年目から6年目の教員2,153名から回答を得た（回答者の校種別人数内訳はP7参照）。

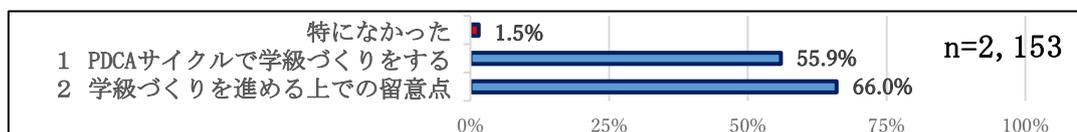
まず、アンケート回答者の本ガイドブックに対する「満足度（レベル1）」や「学習効果（レベル2）」の状況について調べた。

(1) 「(各章・項目毎) ガイドブック中で参考になったことは? (複数回答可)」

「Ⅰ章 はじめに【学級づくり理論編】」を読んで参考になったこと（複数回答可）



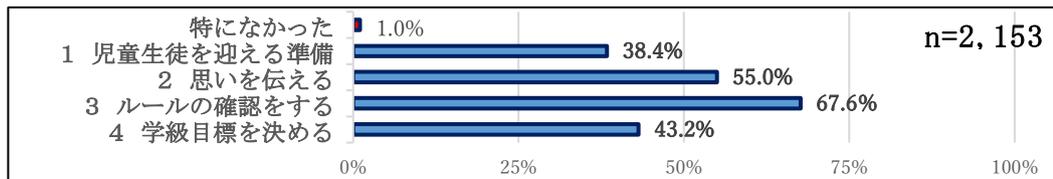
「Ⅱ章 学級づくりの進め方」を読んで参考になったこと（複数回答可）



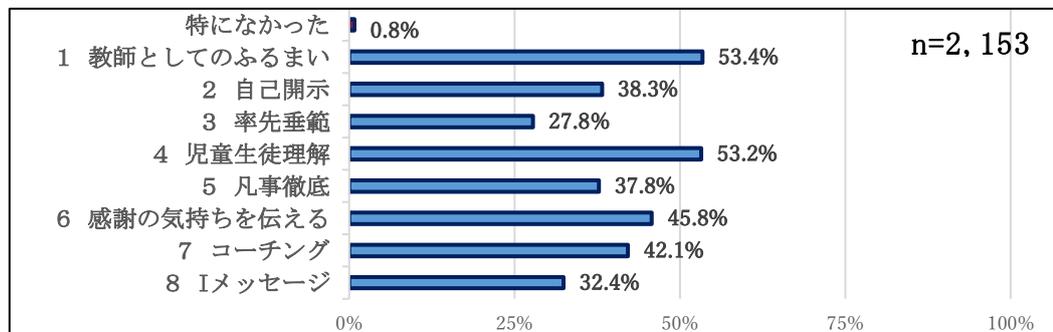
※1 半構造化面接とは、質問をある程度決めておき、回答者の反応に応じて柔軟に質問を変えていく面接方法



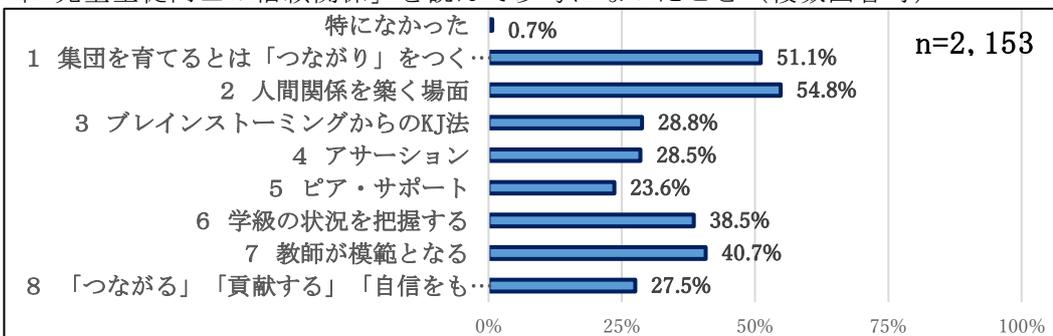
「Ⅲ章 学級開き」を読んで参考になったこと（複数回答可）



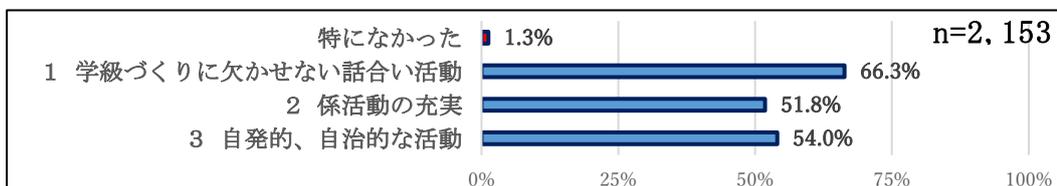
「Ⅳ章 教師と児童生徒の信頼関係」を読んで参考になったこと（複数回答可）



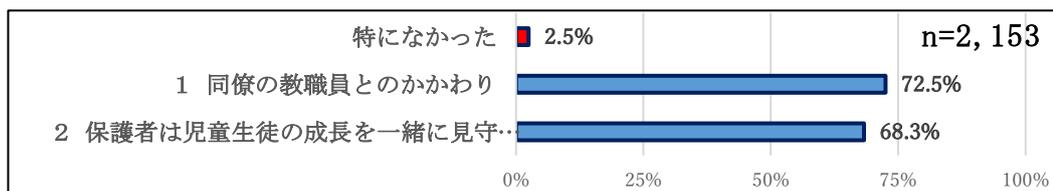
「Ⅴ章 児童生徒同士の信頼関係」を読んで参考になったこと（複数回答可）



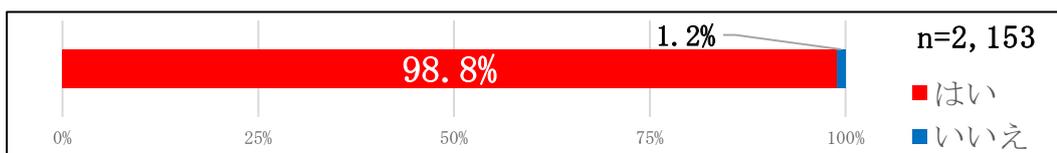
「Ⅵ章 主体的に活動できる学級」を読んで参考になったこと（複数回答可）



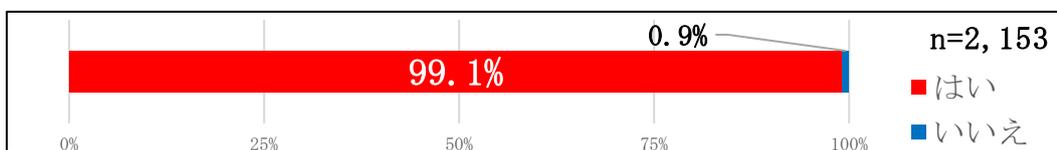
「Ⅶ章 同僚・保護者との関係づくり」を読んで参考になったこと（複数回答可）



(2) 「ガイドブックは分かりやすく、理解できるものになっていた？」



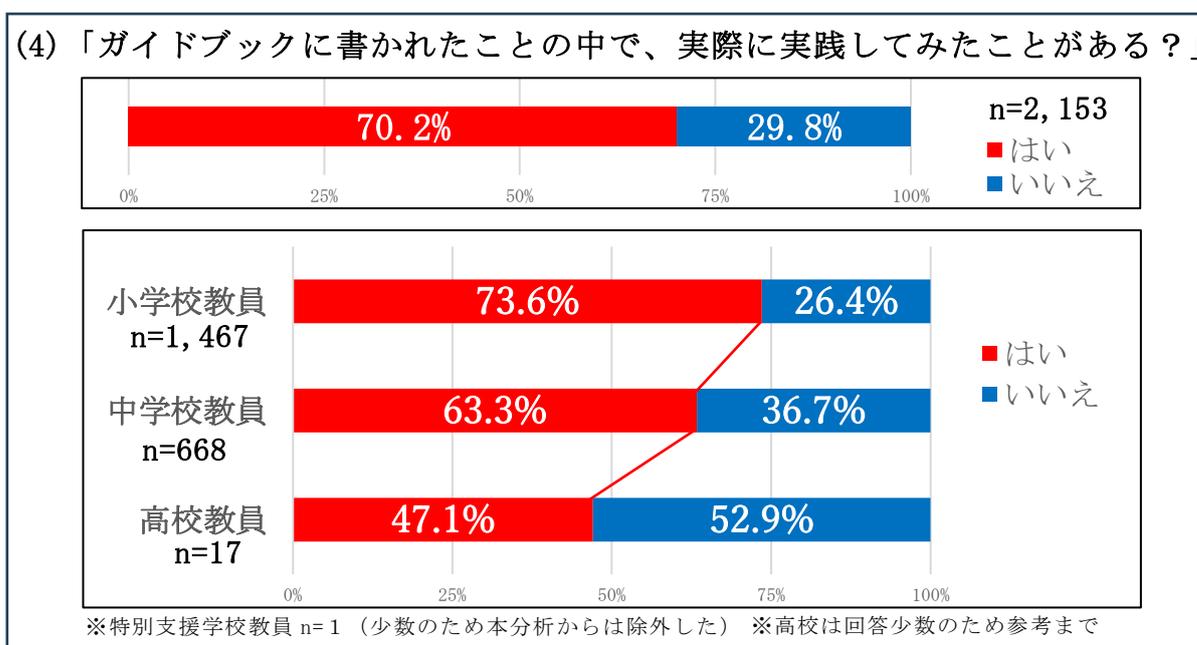
(3) 「ガイドブックは学級づくりの助けになると思う？」



全ての章について「(参考になることが) 特になかった」の回答は1%前後であり、項目毎に見ると、その全てが多くの教員にとって「参考になる」と感じられたことが分かる。また、本ガイドブックの内容について、ほぼ全員が「分かりやすく、理解できる」「学級づくりの助けになる」と肯定的評価をしている。肯定的に評価した理由を見ると、「現在悩んでいることへの回答がたくさんある」「学級開きやクラス会議の進め方等、経験したことのない活動まで掲載されており、大変勉強になった」「実践例をもとに自分の学級でも取り組むことができる」等、日々の学級づくりに役立つ学びを得ていることがうかがえる。

以上のことから、本ガイドブックの内容が、多くの若年層教員に質的に認められており、本ガイドブックが「教職員研修用カークパトリック・モデル」のレベル1（反応：満足度）・レベル2（学習効果：知識・理解等の習得）に十分に達していると考えることができる。

次に、アンケート回答者の本ガイドブックによる「行動の変容（レベル3）」の状況について調べた。



70%以上の教員が本ガイドブック読後に「実際に実践してみる」という「行動の変容」が起きている。実際に実践してみたことは、「教師と児童生徒との信頼関係」に関する実践（Iメッセージ、コーチング、自己開示等）・「児童生徒同士の人間関係」に関する実践（アサーション、ブレインストーミングとKJ法等）・「主体的に活動できる学級づくり」に関する実践（シンク・ペア・シェアによる話し合い活動、係活動の充実等）等、多岐に渡っていた。

このことから、本ガイドブックは「教職員研修用カークパトリック・モデル」のレベル3（行動：行動の変容）相当の有用性があると考えられる。本ガイドブックは、各教育事務所から推薦された教諭の様々な学級づくりに関する実践事例を収集し、まとめられている。そのため、その内容は多くの教員にとって魅力的・具体的であり、多くの教員が「やってみよう」という思いをもつことにつながったと考えられる。



一方、校種別（小・中・高校教員）の割合（※高校は回答数が少数のため参考まで）は、「小、中、高」と順に下がっている。この背景は、本ガイドブック取材対象の多くが小学校であることが考えられる。本ガイドブックの掲載写真・取組等の多くが小学校のものであることから、小学校教員にとって本ガイドブックの内容がより身近に感じられたことから、この結果になったと考えられる。今後の学級づくり調査研究やガイドブック改訂における課題としては、中・高校教員らの学級づくりを念頭に置いて取り組む必要があると考える。

アンケートの最後に、今後ガイドブック掲載を望むテーマについて聞いた。下の表は、掲載希望の多かったテーマ上位5つと、そのそれぞれの校種別順位（※高校は回答数が少数のため参考まで）をまとめたものである。

(5) 「今後、ガイドブックに掲載されると役立つと思うことは？（複数回答可）」

今後ガイドブック掲載希望テーマ（上位5つ） n=2,153		校種別順位		
		小	中	高
1	児童生徒との人間関係づくりの手立て（48.0%）	2	1	8
2	ICTを活用した学級づくりの手立て（46.7%）	1	3	1
3	保護者との関係づくり（41.1%）	3	2	3
4	児童生徒同士の人間関係づくりの手立て（39.9%）	4	4	11
5	学級開きについて（34.3%）	8	12	2

※高校は回答少数のため参考まで

学級づくりにあたり、校種を問わず大切なことがある。学習指導要領には「学習や生活の基盤として、教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」（第1章総則 第4 児童の発達の支援 1 児童の発達を支える指導の充実）とある。また、GIGA スクール構想が進み、「1人1台端末」と「高速大容量ネットワーク」が一体的に整備される中、それらを積極的に活用して学級づくりをする手立ての研究も必要となってくるだろう。さらに、児童生徒のよりよい学級生活のためには保護者との連携も欠かせない。今後ガイドブック掲載を望む声が多いテーマは、昨今の学校教育の潮流を背景に挙げられていることが窺える。

今後ガイドブック掲載を望む声が多いテーマについて、校種別（小・中・高校教員）（※高校は回答数が少数のため参考まで）に見ると、ニーズの違いが分かる。当然、校種によって児童生徒の発達段階は異なり、学級づくりにおいて校種別に教師が「重み」を置く点は違うだろう。今後の学級づくり調査研究やガイドブック改訂の際は、学級づくりにあたり校種を問わず大切なことに加え、各校種のニーズに応じるガイドブック（例：「中学校・学級づくりガイドブック」）があるとよいのではないだろうか。

イ モニター調査協力者への調査結果

県内小・中・義務教育学校に在籍する1年目から37年目の教員22名の協力を得た。校種別の内訳は小学校14名・中学校7名・義務教育学校1名である。まず、モニター調査協力者の本ガイドブック活用による「学校・子供の変容



(レベル4)」の状況について調べた。

(1) 「(各章・項目毎) ガイドブック中で実践したことと、その結果は？」

モニター 協力者	ガイドブック中で 実践したこと	実践の結果 (○・△・不明) とその様子 (子供の反応・自身の感想等)
1	II章「継続しよう」等	○ 子供の頑張りを見えるようにすることで、 <u>努力を続ける子供が増えた。</u>
2	II章「スモールステップで支援しよう」等	○ 子供たちが「次はこれをやってみよう」と、 <u>さらに上の目標を設定していくようになった。</u>
3	II章「スモールステップで支援しよう」等	○ <u>不登校児童への働きかけで、段階を踏んだ目標設定により、少しずつ学校になじめた。</u>
4	III章「思いを伝える」等	○ <u>道徳授業で視覚化して情報を伝えることを意識して、子供の反応がよくなった。</u>
5	IV章「感謝の気持ちを伝える」等	○ <u>1年生児童が、自分の係以外のことにも積極的に取り組むようになった。</u>
6	IV章「Iメッセージ」等	○ Iメッセージの視点をもって話すと子供の反応がよくなった。
7	IV章「感謝の気持ちを伝える」「Iメッセージ」等	○ Iメッセージや言葉遣いを意識したり、感謝の気持ちノートを活用したりしたことで子供からの「ありがとう」が増えた。
8	IV章「児童生徒理解」等	○ 視覚を通して見通しをもたせることで、 <u>自己決定できる子供が増えた。</u>
9	V章「行事・クラス会議」等	○ <u>話し合いが活発になり、子供同士の関わり合いをたくさん作ることができた。</u>
10	VI章「話し合い活動の事前準備」等	○ <u>学級委員が話し合いの流れを理解することで、準備ができ、話し合うことができた。</u>
11	VI章「話し合い活動の形態」等	○ 子供たちが <u>スムーズに話し合いをすることができた。</u>
12	VII章「同僚の教職員とのかかわり」等	○ 連携における留意点を意識することで <u>情報共有ができ、とても役に立った。</u>
13	VII章「『ハウレンソウ』マニュアル」等	○ ハウレンソウによる気持ちの安心感が違う。 <u>心が軽くなり、安心して仕事ができる。</u>
14	VII章「同僚の教職員とのかかわり」等	○ <u>同僚と助け合ったり教え合ったりできて情報交換でき、業務改善にもつながると感じた。</u>
15	II章「PDCA サイクルで学級づくり」等	○ <u>計画をすることについて、自分自身が意識をするようになった。</u>
16	III章「ルールを確認をする」等	○ ルールの目的を子供たちと一緒に考えることで、 <u>ルールを守ろうとする生徒が増えた。</u>
17	IV章「自己開示」等	○ 自分が苦手なことやできないことを生徒に示すことで、 <u>気持ちが楽になった。</u>



18	中学校	IV章「Iメッセージ」「自己開示」等	○	<u>生徒が目を見て、心を開いて話をしてくれているような実感がある。今まで距離を感じていた生徒とも、少し距離が縮まったように思う。</u>
19		V章「行事」等	○	上級生に頼ってばかりだったが、行事を通して「自分たちで成功させよう」と、 <u>協力する気持ちが育まれてきた。</u>
20		VI章「話し合い活動の進行」等	○	教師が話し合い活動の見通しをもつことにより、それが <u>生徒の主体的話し合いにつながった。</u>
21		VII章「傾聴」等	○	<u>保護者との距離が縮まった。保護者から子供の様子を積極的に話してくれるようになった。</u>
22	義務	II章「学級づくりの進め方」等	○	教務主任として、若年層の先生方をOJTで支援するのに活用した。自分自身の経験も併せて話すことで、よい研修資料となった。

(2)「ガイドブックは子供たちの『よりよい人間関係づくり・自己有用感』の育成に役立てられたか？」

①そう思う ②ややそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない				
ガイドブックについての質問内容	①	②	③	④
ガイドブックは、よりよい人間関係づくりに役立ったと思いますか。	18	4	0	0
<p><「(やや) そう思う」理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ○人間関係づくりの具体的なことがあって活用しやすかった。 ○教師と児童・児童同士・保護者・同僚の人間関係づくりについて書かれているのでよかった。 				
ガイドブックは、子供たちが自己有用感（「人の役に立った・喜んでもらえた」というような感覚）をもてるようになることに役立ったと思いますか。	12	8	2	0
<p><「(やや) そう思う」理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ○「感謝を伝える」を通して、子供たちが自分が役に立っているという思いをもつことに役立てられた。 ○係活動の充実を図ることで、自己有用感をもてる子供が増えた。 <p><「あまりそう思わない」理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ●学級の実態に対して、思うような取組ができず、成果が感じられなかった。 ●実践したが、目に見えた効果が出ているとは思わないから。 				

本ガイドブックを活用したモニター協力者 22 名は、本ガイドブックを学級づくり、部活動、授業等の様々な機会に活用している。そして、その全員から、活用によってよい結果（子供の変容等）が生じたという報告があった。



よい結果として、本ガイドブックの3つの柱である「教師と児童生徒との信頼関係づくり」「児童生徒同士の間関係づくり」「自主的な学級組織形成」が進んだことがエピソードと共に語られた。また、同僚教員との連携（モニター協力者12・13・14）・保護者との関係づくり（モニター協力者21）・不登校児童への働きかけ（モニター協力者3）・学年の変容（モニター協力者19）・若年層教員指導資料としての活用（モニター協力者22）等のよい結果があったことが分かる。そして、本ガイドブックが「よりよい人間関係づくり・自己有用感の育成」に役立ったという声が多い。

しかし、本ガイドブックがよい結果（子供の変容等）を生んだというより、各教員が学級等の実態を踏まえ、本ガイドブックの内容をアレンジして活用することで、よい結果（効果）につながったという方が、実際には近いだろう。また、モニター協力者が本ガイドブックを活用した期間は2か月程度と短い。

以上のことから、本ガイドブックは「教職員研修用カークパトリック・モデル」のレベル4（結果：学校・子供の変容）相当の有用性があるとまで言い切ることは難しいと考える。しかし、本ガイドブックが、レベル4（結果：学校・子供の変容）相当の有用性をもつ可能性も窺える。その検証のためには、より長期にわたる本ガイドブック活用モニター調査も必要である。

次に、モニター調査協力者に、本ガイドブック活用後の感想を聞いた。

(3) 「ガイドブックを活用した感想（気が付いたこと等）」

本ガイドブック内容への肯定的評価

コーチングの内容が一番印象に残っている。今後も意識して取り組んでいきたい。

担任をしたことがない先生であっても、これを読めば学級づくりのイメージがもてる。

本ガイドブックへの要望

主体的に活動できる学級づくりに関して、具体的な実践例がもっとあるとよいと思う。

グループエンカウンター等の事例がたくさんあると嬉しい。

「感謝の気持ちを伝える」という点が印象に残った。また、低学年に特化した内容のものがあると嬉しい。

本ガイドブックの分量について

内容としては十分である。これ以上多いと読む気にならないので丁度よい分量である。

校種別ガイドブック作成の必要性

写真がほとんど小学校の写真だと感じた。中学校でも係活動があるので、「中学校に関する情報」がもっと欲しかった。中学校版の実践例がもっと欲しい。



活動が小学校のものが多いように感じた。次回の改訂では、中学校での実践例も多数取り入れてほしい。

小学校寄りの内容だと思った。中学校でも役立つが、写真が小学校ばかりだと思った。

本ガイドブックについて、肯定的な評価と共に「要望」も聞くことができた。多いのは「小学校寄りの内容であるため、中学校に関する情報がもっとあるとよい」という声である。これは、先に述べたように「本ガイドブック取材対象の多くが小学校であること」が影響しているためだろう。本ガイドブックに「中学校等の情報」を加えることも考えられるが、その一方で「丁度よい分量である」という声もある。日々、様々な業務を抱える学校現場の先生方には、より活用しやすいガイドブック作りという観点から、分量等への配慮も求められる。

これらのことから、今後の学級づくり調査研究では、校種別ニーズに応じる校種ごとのガイドブック（例：「中学校・学級づくりガイドブック」）づくりの検討も必要と考えられる。

6 研究のまとめ

(1) 成果

ア 「学級づくりガイドブック」の有用性を調べるために、カークパトリック・モデルを教職員研修にあてはめた「教職員研修用カークパトリック・モデル」を活用し、本ガイドブックの有用性や課題について検証することができた。

イ 1年目から6年目の教員へのアンケート調査結果から、「学級づくりガイドブック」が「教職員用カークパトリック・モデル」の「レベル1（満足度）」・「レベル2（学習効果）」・「レベル3（行動：行動の変容）」相当の有用性があることが実証できた。

ウ モニター協力者の「学級づくりガイドブック」活用調査から、本ガイドブックは「教職員研修用カークパトリック・モデル」の「レベル4（結果：学校・子供の変容）」相当の有用性をもつ可能性を窺うことができた。

(2) 課題

「学級づくりガイドブック」の有用性を調べるためには、より長期間（例：年度始めから年度末）にわたるモニター協力者の調査が必要である。

(3) 今後に向けて

今後の学級づくり調査研究では、校種別ニーズに応じる「校種別ガイドブックづくり」を検討することが必要である。

【参考資料】

- 前川清一・波佐間裕・廣野康孝・吉村良子・中野洋一. 「効果的な研修」に関する研究. 熊本県立教育センター紀要. 2007, vol136
- 土田雄一. 基礎期同年代教員集団による課題解決型研修の有効性. 千葉大学教育実践研究. 2010, 第17号, pp. 29-41

